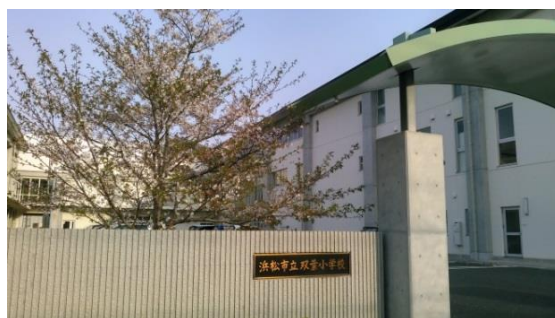


「思いを受けついで」

浜松市立双葉小学校 校長 宮田真由美

本校は、平成20年、発達支援学級や言語通級指導教室の実績をもつ浜松市立南小学校と地域を土台としてキャリア教育の基礎を培ってきた高砂小学校の統合により開校した14年目を迎える学校です。政令都市浜松の玄関口に位置しており、県下最大規模の百貨店、世界とつながる先端企業のビル、立ち並ぶビジネスホテル、活況を呈する商業施設、東西南北を走る広い道路、そして、東海道本線・新幹線浜松駅等がある浜松の原動力とも言える地区にあります。



そんな立地条件であり、本校のことばの教室には入級希望者が多いことから、本年度は幼児言葉の教室が1教室増となり、児童2教室、幼児3教室で運営を行っています。

本校には、ことばの教室5教室の他、通常の学級6学級と発達支援学級6学級があります。多様性を大切にされた教育が展開されている本校は、小規模特認校として、市内のどこからでも通学が許可されています。その制度を利用して、「ことばの教室」に通っていた縁から、本校に入学する児童もいます。

また、校長室には、県下3番目に開設された「ことばの教室」の原点をうかがい知ることが出来る冊子が残っています。「ことばの教室」の親の会のみなさんと先生方で作成した「あゆみ」という冊子です。第19号にあたる平成5年度の冊子には、以下のような当時の校長の言葉が掲載されていました。

「本校に『ことばの教室』ができて、24年になります。今年も、お母さんと一緒にたくさんの子供たちが通いことばの改善をしながらすこやかな成長をされておられますことに、職員一同心からお喜びを申し上げます。ことばの発達は子供たちの無限の可能性によるものですが、適切な援助の継続がなくてはできません。本校の職員による指導がことばの改善や成長に役立っていることに喜びを感じるとともに、継続した指導のために御尽力と御協力を賜りましたお母さんをはじめとする御家族の皆様にお礼申し上げます。」

当時も今も、保護者と連携をとりながら、一人一人のお子さんへ適切な支援をしようとしている職員の思いは一緒です。子供のことばの改善や成長のために今後も尽力することばの教室でありたいと考えます。

季節感を大切にした掲示・制作

チューリップ、紫陽花、ひまわりと、1学期間だけでも、ふと気が付くといつの間にか廊下の掲示が替わっていました。

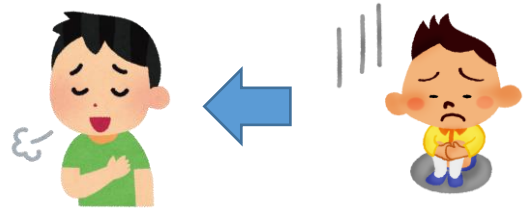
また、廊下の天井に張った網からぶら下がっていた子供たちの制作作品も、鯉のぼり、つばめ、てるてるぼうずと移り替わりました。

幼児担当者がいつも季節にあった掲示や制作を考えて細かな準備をしてくれるおかげで、通級した子供や保護者が常に季節を感じられます。



吃音グループ指導

吃音は自分だけじゃない。
吃音は悪くない。
吃音があっても何でもできる。
吃音のことを話せる仲間がいる。



そう実感してほしくて、吃音のグループ指導をしています。

3年生の男児2人(A児・B児)のグループ指導を紹介します。

A児

発吃は3歳。中核症状は語頭音の連発。やや多動性がある。2年生後半から、着席して話を聞けることが増えた。聴覚過敏があり、在籍校では、避難訓練の警告音や運動会のピストルの音に過敏に反応し、合理的配慮を要する。聴覚記憶力、言語力は高い。

吃音については、1年生の頃から抵抗なく話し合いができた。掛け算九九で言いにくい数字がある、最近詰まることが増えたなど、困り感を感じた時に、すぐに相談できる。

B児

発吃は年少夏休み明け。中核症状は語頭音の連発、阻止が多い。理解力があり、語彙も豊富である。

自己紹介に強い拒否感を持っていたが、現在は克服できている。自分の吃音のことを話すことに抵抗があるようだったが、グループ指導を始めてから、幼児期から現在までの吃音の困り感を話せるようになった。吃音を治したいという願望はあるが、吃音があっても積極的に話したり発表したりしている。

グループ指導の経緯

- ・ 1年生1学期から、月1回グループ指導開始(個別指導と並行)。
- ・ 小林宏明先生(金沢大学)の吃音ポータルサイトを参考にして、声を出す時の体の仕組みと気持ち、自己の吃音症状、吃音クイズ、いろいろな話し方、こんな時どうする?などの学習を少しずつ進めてきた。現在は話しやすい・分かりやすい話し方を学習中。

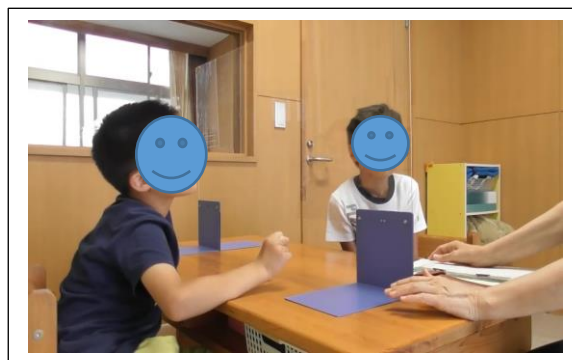
7月のグループ指導の様子

活動	ねらい	表れ
1 自由会話	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題に入る・話題をかえるタイミングをつかむ。 ・ 自分の話題に固執しないで、会話の流れを大切にする。 ・ 聞く・話すの役割交代が自然にできる。 	<p>【A児】 相手の話が長くなると、話題に入るタイミングをつかめず、落ち着かなくなる。</p> <p>【B児】 時間を気にせずに自分の話したいことに執着する傾向があった。</p>
2 説明キング 動作絵を見て、どのような格好をしているか、説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他者意識をもって、分かりやすい話し方・説明をする。 ・ 自分の説明の仕方(声の大きさ・速さを含む)を振り返り、相手が理解しやすい話し方を考える。 	<p>【A児】 指示語や「少し」などの曖昧な言葉では、うまく伝わらないことが分かり、2回目は懸命に言葉を選んでいった。</p> <p>【B児】 吃音症状があっても分かりやすく説明すれば伝わることを理解できていた。「手の甲」「横向き」など、具体的な単語を使っていた。</p> <p>【A児・B児】 声の大きさや速さも意識できていた。 他者から「○(よくわかった)」の評価をしたもらい、満足そうだった。</p>
3 吃音相談室	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校や家庭生活の中での困ったことを話し、解決方法や対応方法について考えを出し合う。 ・ 吃音について、感じていることをオープンに話すことができる。 	<p>【A児】 吃音のことを笑われたこと、また笑われるのではないかという不安があることを話した。通級担当者から担任に伝えてほしいと要望した。</p> <p>【B児】 自分の経験から、「やめて」と言えばどうかと提案した。</p>

		【A児・B児】 みんなで相談し、担任の先生に本人と担当者から伝えることにした。
4 サーキット ・ トランポリン ・ ストラックアウト ・ ボーリング	・ どんな運動(遊び)をするか、話し合っ て決めることができる。 ・ ルールを守りながら楽しく運動 することができる。	【A児・B児】 協力して準備・片付けができた。ル ールから逸脱しようになる時があ ったが、注意しあって活動できた。 体を動かすことが好きなので、 楽しく運動ができた。

2年間のグループ指導を通して、担当者の願いが、子供たちに浸透してきたと感じています。

今年度は、新しいメンバーを誘いたいと提案したところ、「もっと楽しくなるからいいよ。」「僕たちは吃音の先輩。」「乗り越えてきたことを教えてあげる。」という言葉が聞かれました。吃音相談室で、常にオープンに話し合ってきたからこそ、このような言葉が出てきたのだと思います。乗り越えなければならない壁は、これからたくさんあるかもしれませんが、「一人ではない」「今までも困ったことはあったけれど乗り越えられた」という自信・自負は今後の糧になると思います。また、困った時に周囲への援助要請ができるようになったことも、大切なスキルでした。



全国ことばを育む会発行の『ことば N0301』(2021年5月20日発行)には、吃音が主訴で通級していた児童や保護者の寄稿が掲載されています。子供が心的エネルギーの発露として繰り返し遊ぶ様子や、それに根気よくつき合う指導者の姿には、胸を打たれるものがありました。また、通級指導教室について書かれていて、初心に戻る思いでした。

